

本学会及び会員による「スポーツ政策とジェンダー」に関する研究業績情報（2025年3月更新）

2017年にスポーツ庁をはじめとする国内5つのスポーツ統括団体が Brighton・Plus・ヘルシンキ 2014 宣言に署名していますが、スポーツ基本計画等の政策に十分反映されているとは言い難い状況です。また、女性トップアスリート以外の大多数の女性のスポーツ振興策やセーフスポーツ・センターなどの実現への道のりは遠いように思われます。2025年に開催される24回大会では、「スポーツ政策とジェンダー」をテーマとして議論を交わす予定です。

本学会には、スポーツ行政に関する専門家も多く、『スポーツとジェンダー研究』誌等に蓄積された研究成果は多数に上ります。以下のリストは「スポーツ政策とジェンダー」に関する本学会及び会員による2015年以降の研究業績リストです。

これらの研究成果が活用され、スポーツ行政とジェンダーに関して、高い人権意識と科学的知見に基づいた認識が社会に広まることが期待されます。

1. 『スポーツとジェンダー研究』及び学会関係の出版物

(1) 『スポーツとジェンダー研究』

J-STAGE で公開されていますが、最新刊については発行と J-STAGE での公開時期に数ヶ月のズレがあります。
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sptgender/-char/ja>

井谷恵子・大勝志津穂・木村華織・杉本理恵・高峰修・山口理恵子・三上純（2022）東京2020大会“女性蔑視発言”の追跡調査から考えるスポーツ界のジェンダー平等 報告1. Vol.20: 82-100.

來田享子・田原淳子（2022）IOC ジェンダー平等とインクルージョン目標 2021-2024. Vol.20 : 112-116.

山口理恵子・稲葉佳奈子・岡田桂（2020）スポーツとダイバーシティ：スポーツの包摂・承認・排除. Vol.18: 49-50.

稲葉佳奈子・岡田桂・山口理恵子（2020）女性スポーツ政策に内在する「排除」の可能性. Vol.18: 51-52.

山口理恵子・稲葉佳奈子・岡田桂（2020）新自由主義と女性スポーツ. Vol.18: 53-54.

井谷聡子・井谷恵子（2018）スポーツ・メガイメントの政治とジェンダー研究の視界. Vol.16: 48-57.

サイクス,H.（2018）スポーツ・メガイメントの政治学：ジェンダー，セクシュアリティ，反植民地主義の観点から. Vol.16: 58-61.

建石真公子（2017）スポーツ競技の公正とジェンダーのはざままで”本当の女性”をどのように証明するのか -Anais Bohuon, Test de feminité dans les compétitions sportives: une histoire classée X, Edition iXe,2012, Conclusion,p.165-170（アナイス・ボウオン『スポーツ競技における女性性確認検査（性別確認検査）-X分類の歴史-』の試み-. Vol.15: 98-106.

建石真公子（2016）スポーツにおける「平等」と「公正」とは. Vol.14: 118-120.

近藤良享（2016）スポーツ・ルールにおける平等と公正：男女別競技からハンディキャップ競技へ. Vol.14: 121-133.

新井喜代加（2016）タイトルIXに基づく参加機会の平等と公正：sexの平等からgenderの平等へ. Vol.14: 134-135.

來田享子（2016）オリンピック憲章では何が両性の平等だと考えられてきたか：「根本原則」と「女性の

参加規定」の分析を中心に. Vol.14: 136-138.

田原淳子 (2015) 第 6 回 IWG 女性とスポーツに関する世界会議にみるスポーツとジェンダーの今日的課題:「ブライトン+ヘルシンキ 2014 宣言」と第 6 回世界会議の結論・勧告から. Vol.13: 202-215.

(2) 『データでみるスポーツとジェンダー』日本スポーツとジェンダー学会編, 2016, 八千代出版.

新井喜代加・松宮智生・波多野圭吾「研究とジェンダー」pp.99-114.

高峰修・熊安貴美江「暴力とセクシュアル・ハラスメント」pp.130-149.

(3) 『よくわかるスポーツとジェンダー』飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著, 2018, ミネルヴァ書房.

以下は、スポーツ政策とジェンダーに関してコンパクトにまとめられているページです。

白井久明「スポーツ政策 日本」pp.88-89.

高峰修「スポーツ政策 韓国」pp.90-91.

高峰修「スポーツ政策 オーストラリア」pp.92-93.

荒井啓子「スポーツ政策 イスラーム圏」pp.94-95.

田原淳子「スポーツ政策 ドイツ」pp.96-97.

田中暢子「スポーツ政策 イギリス」pp.98-99.

建石真公子「スポーツ政策 フランス」pp.100-101.

飯田貴子「スポーツ政策 フィンランド」pp.102-103.

熊安貴美江「スポーツ政策 カナダ」pp.104-105.

新井喜代加「スポーツ政策 アメリカ」pp.106-107.

2. 上記 1 以外の会員による研究

(1) 建石真公子会員

建石真公子「スポーツという権利、スポーツにおける権利—ジェンダーと人権枠組の視点から—」ジェンダーと法 No.19(2022 年) (pp.107-122)

建石真公子「スポーツにおける性的暴力の防止と規制—フランスにおける法と政策について」日本スポーツ教委会スポーツ医・科学委員会 令和 4 年度 研究報告 IV,p.45-61.

建石真公子「ジェンダーとスポーツ関連法」『21 世紀スポーツ大事典』大修館、(pp.124-127, pp.130-132)

(2) 新井喜代加会員

【著書】

新井喜代加 (2018) 高校野球に女子生徒は参加すべきか? 石堂典秀・建石真公子 (編著), スポーツ法へのファーストステップ. 法律文化社, pp. 36-53

新井喜代加 (2019) トランスジェンダーの人々にとって安全・安心なスポーツ環境を目指して. 掛水通子 (監修) 山田理恵・藤坂由美子・及川佑介 (編著), 身体文化論を繋ぐ—女子・体育・歴史研究へのかけ橋として—. 叢文社, pp. 298-308

新井喜代加 (2020) ジェンダー (男女平等) をめぐるスポーツ権. 日本スポーツ法学会 (監修) 浦川道太郎・吉田勝光・石堂典秀・松本泰介・入澤充(編集), スポーツ法学 (第 3 版). エイデル研究所, pp. 53-

新井喜代加 (2023) スポーツにおけるジェンダー平等. 新井喜代加・武田丈太郎 (編著) はじめて学ぶスポーツと法. みらい, pp. 55-70

新井喜代加 (2025) 女性スポーツに関する施策. 齋藤健司・横山勝彦・真山達志・出雲輝彦 (編著), スポーツ政策学. 成文堂, pp. 411-418 (9月1日刊行予定)

【論文】

新井喜代加 (2024) 米国のタイトルインに基づくスポーツとジェンダー平等政策: スポーツの参加機会の平等をめぐって. 体育・スポーツ政策論叢, 4(1): 23-34, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jspehsspesp/4/1/4_23/_article/-char/ja/

(3) 来田享子会員

来田享子 (2024) 日本のスポーツ界のジェンダー平等に向けて何が必要とされているか. 現代スポーツ評論 50: 45-61.

来田享子 (2023) (講演記録) オリンピック運動におけるジェンダー平等の取り組みの現状と課題. 現代スポーツ研究 7: 24-51.

来田享子 (2023) 近年のオリンピック・ムーブメントにおける人権に関する基本方針の動向—開催都市契約の改正と「IOC 人権に関する戦略枠組み」の公表を中心に—, 令和4年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告IV「体育・スポーツにおける暴力・虐待・差別等の人権侵害防止に関する調査研究」, 公益財団法人日本スポーツ協会 pp.7-19.

来田享子 (2022) オリンピックとジェンダー: 女性の参画をめぐり歴史と平等に向けた政策の課題. 体育の科学 72 (8): 517-521.

来田享子 (2022) スポーツ・ジェンダー学からみた政策専門領域への期待. 体育・スポーツ政策論叢創刊号: 27-40.

来田享子 (2020) 教育におけるスポーツの市民権獲得—クーベルタンの目論みと「あるべき身体の承認の場」の相克—, 日本の教育史学 63: 14-18.

大勝志津穂・来田享子 (2019) 中央競技団体が取り組む女性のスポーツ振興戦略に関する基礎的研究. 中央大学体育研究所紀要 33: 83-88.

(4) 高峰修会員

高峰修 (2024) 日本におけるスポーツとジェンダー平等に関する政策の現状と課題. 体育・スポーツ政策論叢 4(1): 14-22.

高峰修 (2020) 東京2020オリンピック開催に向けたスポーツ政策における女性アスリートの身体: 「女性特有の課題」としての生殖機能の保護と管理. 日本スポーツ社会学会編集企画委員会編. 2020 東京オリンピック・パラリンピックを社会学する. 創文企画, pp.111-129.

(5) 山口理恵子会員

山口理恵子 (2022) 「スポーツを通じた女性の活躍促進」とはいかなる政策なのか. 岡田佳・山口理恵子・稲葉佳奈子編. スポーツとLGBTQ+. 晃洋書房, pp.122-140.